様式 C-7-2

# 自己評価報告書

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19252002
研究課題名（和文）　東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究
研究課題名（英文）　Study on Basic Structure, Dynamics, and Sustainable Development of 'Local World' in East Asia

研究代表者
藤井　勝（FUJII MASARU）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：20165343

研究代表者の専門分野：社会学
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：地方社会、農村、都市、持続可能性、社会変動、グローバル化、東アジア

１．研究計画の概要

（１）研究の目的

東アジア（東北アジアと東南アジアを含む）の発展はめざましく、この発展を背景に「東アジア共同体」構想も生じている。しかしながら注目されているのは主には大都市・首座都市（圏）であり、地方社会は十分に視野にない。本来、東アジアの地域的特性は、広大な地方社会を内包し、多様な地方文化が息づいていることである。多様な地方社会に立脚した社会発展なしには、「東アジア共同体」も実現できないから、地方社会の解明を強化し、発展させる必要がある。

本研究は、以上の問題意識にもとづいて「地方的世界」に焦点をあてる。この「地方的世界」とは、地方都市（町）－周辺農山漁村関係から成り立つ地方社会である。この「地方的世界」の原理や伝統そして動態を実証的に解明することを目的にしている。同時に、21 世紀の「地方的世界」の豊かで持続可能な発展の条件を示すことを目指している。

（２）研究の課題

そのため以下のように研究課題を設定する。

①「地方的世界」の歴史的形成プロセスを、歴史社会学的な視点から分析する。それを通じて、「地方的世界」が一つの「世界」として形成される意味や論理を明らかにする。②「地方的世界」の変動や動態を分析する。とくに植民地化、国民国家形成、東西冷戦体制といった経験は、「地方的世界」に大きな変化を生み出した。③「地方的世界」のグローバリズム下における展開を分析する。現代的要因が「地方的世界」に何をもたらすかを明らかにする。④東アジア内部の様々な「地方的世界」を比較し、「地方的世界」の社会的文化的な共通性と多様性を明らかにする。⑤「地方的世界」の現代的再生や持続可能な発展をナショナリズム、グローバリズム、エスニシズムなどとの関連で明らかにする。

（３）研究の内容

東アジア全体の構造や変動を把握しつつ、主な国々で以下の内容の調査研究を行う。

①第１年次は予備調査を実施し、調査地を確定する。また調査地に関する各種データを収集する共に、聴き取り調査を実施する。②第２年次は、(A)地方都市（町）の歴史的形成と展開、そして B)地方都市（町）と周辺地域の関係の特質を政治、経済、社会、文化の諸側面から明らかにする。そのため資料収集・聴き取りによる現地調査を実施する。③第３年次は、「地方的世界」の現代的変容を重視した現地調査を実施する。必要な場合は、アンケート調査も行う。④第４年次は最終年次であり、補足調査等を実施して本研究の完成度を高める。

２．研究の進捗状況

調査地の特質をより鮮明に示すために、以下の圏域区分を提示しつつ、各「地方的世界」を解明してきた。

（１）日本の日本海側、韓国東部、中国東北部、台湾南部などの調査地は「北東アジア周縁域」と位置づけた。この圏域の「地方的世界」は、現代の東北アジアにおける大都市中心の発展の外に置かれ、大都市圏との格差

が拡大しているが、地方的な独自性（エスニシティも含む）を強化しながら発展を模索していることが明らかになった。また国を超えて、これら周縁域内における「地方的世界」間のネットワークも生成しつつある。

（２）中国西南部、ラオス北部、ベトナム北西部、タイ東北部などの調査地は「東アジア内陸域」と位置づけた。この圏域の「地方的世界」は現代東アジアの地方圏開発として注目されているメコン圏に含まれている。とくにインドシナ戦争により長らく閉ざされた空間であったが、内陸部開発の直中にあって伝統的な「地方的世界」は急速に変容しつつあることが明らかになった。元来、地方性・民族性がきわめて豊かな地域であるが、ナショナルな統合とグローバル化の展開が急速に強まっている。

（３）フィリピン・ルソン島北部、インドネシア・ジャワ中部、ミャンマー南部などの調査地は「東南アジア沿海域」と位置づけた。この圏域の「地方的世界」は海や海上交通と密接に結びつきながら、また植民地化の影響のなかで形成された。そして今日、新しい政治的、経済的、さらに自然的条件に適応・対応しつつ、「地方的世界」の有り方は展開していることが明らかになった。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

第一に、当初の調査計画どおりにほぼ毎年度研究を実施してきたからである。また調査研究の成果を個別の学術論文等だけではなく、年度ごとに冊子体の中間報告書として著してきたからである。第二に、研究会を継続的に進めるとともに、海外研究者を招聘して国際会議等を実施することにより、研究の質的向上また研究ネットワークの充実を順次進めてきたからである。とくに平成 21 年 11 月に実施した国際会議は、本研究の推進にとって大いに意義があった。第三に、平成 20 年度に 2 名の専門家（日本・中国研究と東南アジア研究）、平成 21 年度に 1 名の専門家（地域社会学）から外部評価を受けるなど、研究の点検・改善を継続的に実施してきたからである。これら専門家からは概ね良好で建設的な評価を受けた。第四に、研究分担者の樫永真佐夫氏は第 6 回（平成 21 年度）日本学術振興会賞を受賞したが、その受賞対象となった研究には、本研究の一環としてなされたものを含んでいるからである。

４．今後の研究の推進方策

（１）研究を完成度の高めるため、「基層・動態・持続可能な発展」という視点から、過去 3 年間の研究を調査地ごとに見直す。とりわけ今日のグローバル化における「持続可能な発展」の特質や課題を、調査地に即して解明する。同時に、以上の研究の深化にもとづいて、東アジアの「地方的世界」の「基層・動態・持続可能な発展」の全体像を総括する理論的枠組みを構築することに努める。

（２）以上の研究の推進をより十全なものとするために、最終年度には海外研究者を数名招聘して国際会議（第 2 回目）を開催し、また国内専門家２名程度による最終評価を実施する。

（３）さらに研究成果の出版に向けた準備を積極的に進める。本研究は各年次に中間報告書を作成してきたが、最終年次は研究期間全体を総括する報告書をまとめる。そして、この報告書にもとづいて、来年度に科学研究費の出版助成を申請し、正式な出版を行う。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①樫永真佐夫「ベトナムにおける黒タイの文字文化」『明日の東洋学』、印刷中、22号、2010、査読（無）

②藤井勝「東北タイ農村の《家－村》論的考察」『年報・村落社会研究』44 号、pp.237-263、2009、査読（有）

③福田恵「周辺地域における林業ネットワークの展開過程」『哲学論集』（大谷哲学会）、55 号、pp. 49-69、2009、査読（有）

〔学会発表〕（計 1 件）

①高井康弘「ラオス北部における水牛と人の関わりの変容」東南アジア学会第 79 回研究大会、大阪大学、2008 年 6 月 8 日

〔図書〕（計 3 件）

①藤井勝ほか『東アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究』（平成 19 年度：184 頁、平成 20 年度：216 頁、平成 21 年度：293 頁）、神戸大学

②小倉充之、鈴木則之、首藤明和、魯富子ほか『アジア社会と市民社会の形成』、共著、140 頁（pp.39－58, 59－76）、2009

③西澤信善・北原淳編著『東アジアの経済変容』晃洋書房、全 368 頁、2009

〔その他〕

本研究のホームページ

http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ealocal/index.html